

2026年度

入 試 体 験 会

国 語

注 意

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題は□一から□二まで、17ページにわたって印刷してあります。
- 3 解答の下書きが必要なときは、この問題用紙の余白を利用しなさい。
- 4 解答用紙には、受験番号と氏名を書きなさい。
- 5 解答はすべて解答用紙に書き、解答用紙を提出しなさい。
- 6 句読点、記号は1字として数えなさい。
- 7 本文中には、問題作成のために省略や表現を変えたところがあります。

かえつ有明中学校

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

古代インドで、ブッダの教えを守って悟りの道を歩もうとする人びとが、集まって集団生活をしました。その集まりを「サンガ」と言いました。

「仏・法・僧」をうやまえ、と聖徳太子は言ったといわれます。

伝説ではありませんが、その言葉は日本仏教の中で、<sup>①</sup>連綿として大事にされてきました。そのまま読むと、仏Ⅱブッダ、法Ⅱ真理、僧Ⅱ坊さん、というふうに聞こえます。寺でもそう教えてきました。

<sup>②</sup>しかし、ここでいう「僧」とは「僧伽」のことです。仏法を求める者たちが集まって共に修行する共同体が「僧伽」です。その集団を大切にせよ、というのが「僧」を <sup>A</sup>ソソンチョウセよという教えです。個々のお坊さんをうやまえ、という話ではありません。

この共同体、サンガは、多くの修行者たちが瞑想したり、語り合ったり、<sup>\*たくはつ</sup>托鉢をしたりする場所でした。竹林精舎、祇園精舎などがそれです。

そこで暮らすためには、それなりのきまりがあります。それを乱すことは <sup>B</sup>キビしく禁じられていました。グループや集団には、規則というか、<sup>C</sup>ヤクソクごとが必要不可欠です。また皆と仲良くやっていく必要もあります。しかし、全員が機械のように同じタイプになる必要はないのです。

それぞれに個性もちがう。経歴もちがう。体質もちがう。ちがう人間同士が一緒に何かをやるのだから、全員同じ型にはめようとしても無理なのです。

サンガでもそうでした。そこでは皆と和する必要がある。仲よく生きて、しかも集団の規律は守らなければならない。

当時のサンガは、労働や生産活動をせずに生きる場所でした。社会一般の人にかわって、人間の生き方や、宇宙の真理を探究するのが仕事なのです。

<sup>③</sup>だから生活は世間に依存する。つまり托鉢によって生きることになります。

俗世間ぞくの人びとは、サンガの僧たちに自分たちの労働の一部を喜捨ぎしよする。そして真理を受けとるわけです。

サンガの人びとは、どのように暮らしていたのでしょうか。聞くところでは、集団行動は少なかったようで、それぞれが瞑想したり、問答を仲間としたり、ぶらぶら歩きながら考えたり、先輩せんぱいの話をきいたりしていたそうです。

軍隊のようなキビしい訓練のくり返しではなく、かなり自由な生活だったらしい。

大先達のブッダに対しても、のちの時代のように崇拜すうはいして帰依きえするのではなく、初期のサンガの仲間たちは、

「ゴータマさん、これについてはどう考えてるのかね。わたしはこう思うが、まちがっているだろうか」

といった調子で、気軽に対していたという見方もあります。

ブッダは神格化していきました。

人びとと共に暮らすことは大事です。そこには和がなければなりません。しかし、和するということは、全員が一体化することでは断じてない。人はそれぞれ個性をもった独立者だからです。ちがう人間が集まって、一つの大きなハーモニーを作るのです。

私は「昭和の子こ」です。軍歌や国民歌の黄金期に育って、数かぎりない歌をうたいながら育ってきた。それらの歌は、すべて斉唱せいしょうでした。同じメロディーを全員でうたうのです。合唱とか、ハーモニーの魅力みりょくというものを音楽の時間に教えられることがありませんでした。思えば貧しい世代です。

和声や合唱の魅力というものを知ったのは、戦後になってからでした。いまでは全国各地にママさんコーラス団などもあって、合唱は生活の中にとけこんでいます。

合唱は言うまでもなくハーモニーが土台にあります。それぞれの異なったパートを、各人が同時に唱和する。全員が同じメロディーをうたったのでは戦時中の斉唱に逆もどりになります。すなわち「和して同ぜず」。「個声」が「和」してハーモニーになるのです。

孤独こどくとは、独りでぼつねんと自己をみつめていることではありません。皆と「和」しつつ自己のパートを失わないことな

のです。

それぞれ独立した人間が、自己の音を守りつつ合唱する。自己の持つ特異性や個性、才能などを守りつつ、他と集団を生きたる。他人とちがう自分を守る。それが孤独の本質なのです。

「和して同ぜず」というのは、言いかえれば <sup>D</sup> レンタイしても「一億一心」にはならない、ということです。それは「集团的孤独」というふうに表示してもいいかもしれません。

ロシアやブルガリアで合唱をきいて感動するのは、全員がただ声を合わせようとはしていないことです。それぞれのパートを守りつつ、自分の声でうたっている。

全員が同質の声になろうとはしない。ちがう人間が集まってうたうのだから、それは当然でしょう。だからこそ合唱でありながら、あれほど強い声の合唱になるのです。

合唱でありながら、一人一人の声が聞こえる。聞こえつつ合唱になっている。その辺の微妙な関係が合唱というものの魅力なのではないかと思えます。

「一億一心」というのは、かつての戦争の時代のスローガンでした。自分を殺して大義に奉ずる。ある意味では人間のⅡ。均質、同質をめざす思想です。

どれほどAⅠが発達しても、人間の合唱と同じ音は作れないでしょう。人間の声は、時にひずみ、時に濁り、時にかすれ、時にねじれる。そのすべてがⅢとなつてはじめて合唱が成立するからです。

ひとつのグループ、ひとつのサークルの中で極端に自己主張をしていただけでは運動は成立しません。しかし、全員が機械のように正確に動いたとしても、その集団は生き生きと作用しないでしょう。

「同じくすること」と「同じくしないこと」、そして「孤独であること」と「全体に融和すること」の間には、深い亀裂と対立があります。「集团的孤独」といえば、はたして意味が伝わるでしょうか。「和して同ぜず」とは、そういう二つの中心をもつ「楕円の思想」といってもいいと、私は捉えています。

④ 現実とは常にそういった非論理的な対立をはらむものです。

古代のサンガでは、激しい議論が行われていたといわれます。

私は以前、インドでナールンダ大学<sup>\*</sup>の遺跡<sup>いせき</sup>を訪れたことがあります、そこに当時の問答場のあとが残っていました。一人<sup>ざ</sup>が坐して回答者となる。一人はその前に立って、烈しく<sup>はげ</sup>究問者となる。そこで手を振り声を張りあげ、激しい言葉による決闘<sup>けつとう</sup>が展開するのです。問答とは、本来そういうものでした。⑤ 集団の中で闘<sup>たたか</sup>いつつ和する場が、古代の大学だったので。

(五木寛之『続・孤独のすすめ 人生後半戦のための新たな哲学』より)

\* 托鉢…僧が修行のため、経を唱えながら各家の前に立ち、食物や金銭を鉢に受けて回ること。

\* 喜捨…喜んで寺社や貧しい人に寄付すること。

\* 崇拜…相手を心から敬うこと。

\* 帰依…深く信仰して教えに従うこと。

\* ゴータマ…ブッダの本名。

\* ナールンダ大学…五世紀に創設されたインド最古の仏教の学問所。医学・天文学・哲学なども研究され、最盛期には一万

人の修行者がいた。

問一 ……部A～Dのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ① ① 連綿 の言葉の意味として、もつとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人々の間に静かに広がること。

イ 何度もくり返していること。

ウ とぎれることなく続いていること。

エ ていねいにあつかうこと。

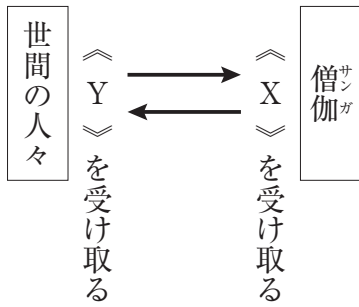
問三 ② しかし、ここでいう「僧」とは「僧伽」のことです。とありますが、「僧伽」の説明としてあてはまらないものを

次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 集団生活をするための規則があり、それを乱すことは禁止されていた。
- イ 修行者達がそれぞれ瞑想したり、問答しあったり、話を聞いたりした。
- ウ ブツダの教えを守り、悟りをひらくために修行する共同体であった。
- エ 他者と仲良くしながら、考えを深めるため、型通りに修行することが大切であった。

問四 ③ だから生活は世間に依存する。とありますが、次の図は「サンガ」と「世間の人々」の関係をまとめたものです。

ア・イは《X》・《Y》のどちらにあてはまりますか。それぞれ記号で答えなさい。



- ア 生産活動
- イ 宇宙の真理
- ウ 食物
- エ 人間の生き方
- オ 金銭

問五 Ⅰ にあてはまる言葉として、もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もちろん      イ したがって      ウ しかし

エ だから      オ また

問六 Ⅱ にあてはまる言葉として、もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一般化      イ 機械化      ウ 社会化      エ 標準化

問七 「僧伽」と「合唱」の例の共通点の説明として、もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 集団行動で必要な範囲を守りつつ、様々な人間が個の才能を活かして調和した活動を行うこと。

イ 集団のルールを守りながら全員の心と能力を一体化して、完成度の高いものを作ろうとすること。

ウ 他者との違いを明らかにして、集団の中でも独りになる時間を作り、自己をみつめ続けること。

エ AIと異なる人間の個性の表現をもっとも重要な活動目標とし、皆で生き生きと活動すること。

問八 Ⅲ にあてはまる四字熟語として、もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 異口同音      イ 以心伝心      ウ 玉石混交      エ 渾然こんぜん一体

問九 <sup>④</sup> 現実とは常にそういった非論理的な対立をはらむ とはどういうことですか。もっとも適当なものを次から一つ選

び、記号で答えなさい。

ア 現実の中で「同じくすること」と「同じくしないこと」が対立することで、「孤独であること」と「全体に融和すること」は実現すること。

イ 現実の中で「同じくすること」と「孤独であること」、「同じくしないこと」と「全体に融和すること」のそれぞれが対立して、両方とも存在できないこと。

ウ 現実の中で「同じくすること」と「同じくしないこと」は実現し、「孤独であること」と「全体に融和すること」は対立して実現しないこと。

エ 現実の中で「同じくすること」と「同じくしないこと」、「孤独であること」と「全体に融和すること」のそれぞれが対立しながらも、両方とも存在すること。

問十 <sup>⑤</sup> 集団の中で闘いつつ和する場 とありますが、筆者はなぜそのような場が必要だと考えていますか。本文全体をふ

まえて六十字以内で説明しなさい。



二 次の文章は、母と二人暮らしのわたし（絹枝<sup>きぬえ</sup>）が、中学生のころ、地域の合唱団に所属する母からの「いっしょにうた

おうよ」というさそいをはねつけてしまったまま、母の出演するコーラス大会の会場を訪れている場面と、その後十三年の年月が経ち、散歩中にそのことを回想している場面です。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① ステージにお母さんがいる。緑のドレスを着たお母さんだ。わりと濃い緑。はっきりした緑。

そのドレスを着たお母さんと、ステージに立つお母さん。A ミナれない二つのお母さんが一気に来て、何だか不思議な気分になる。

ほかの八人と一緒に、お母さんはうたってる。九人。今日は全員がそろってる。練習とちがって、楽譜<sup>がくふ</sup>はなし。

十月。杉並区のコーラス大会だ。コーロ・チェーロの持ち時間は十分。三曲をうたう。区民センターで練習してたあの三曲。

女性は七人で、男性は二人。女性はみんな、お母さんと同じ緑のドレスを着てる。男性は、黒のサテンのシャツに同じく黒のパンツ。

九人はステージに並んで立ち、前にいる指揮者を見てる。宮前先生だ。わたしにはその後ろ姿しか見えない。あ、本番は指揮者がいるんだ、と初めに思った。まあ、それはそうだろう。中学の合唱でも指揮者はいる。音楽の先生がやったりするが、生徒がやったりもする。

ただ、そのときはよくいるピアノ伴奏者がこちらにはいない。それは練習のときと同じ。

音楽の素となるのは声だけ。宮前先生の指揮 B ボウに合わせて発声する。これなら確かに指揮者は必要だろう。いなければ、まずスタートが切れない。みんな、せうの、とやるわけにはいかない。

わたしは一人で客席にいる。（中略）

ひがしこうえんじ 東高円寺にある立派なホールだ。高校の音楽室とは広さがちがう。普通にコンサートをやれてしまいそうな感じ、有料のそれをやれてしまいそうな感じだ。もちろん、今日のこれは区の催し<sup>もよお</sup>だから、無料。

入るときにプログラムをもらったので、コーロ・チェーロがやる三曲の名前がわかった。

一つは初めからわかってた『おほろつきよ朧月夜』で、日本語のもう一つは『はまべ浜辺の歌』。残る英語のものは、『うたアンド・ソー・イツト・ゴーズ』。ビリー・ジョエルという人の曲らしい。

コーロ・チェーロのステージは、『へ朧月夜』で始まり、『へ浜辺の歌』を経て、『へアンド・ソー・イツト・ゴーズ』へ。

練習のときにも感じたことだが。日本語の二つは、まあ、唱歌。唱歌然とした唱歌だ。英語のは、そんな感じでもない。ポップスというのか、タイプがちがう曲。なのに、合唱でくると違和感い かんがまったくなくなるからおもしろい。

そしてわたしは、三曲どれも好き。

『へ浜辺の歌』は、わたしが知らなかっただけで、かなり有名な曲らしい。

練習で何度も聞いたから、もう覚えてしまった。この本番でもまた聞いて、思う。この曲は特に好きだ。いい曲。いいうた。そうとしか言えない。

九人の声が、ステージ上で集まる。声が集まるのは、いい。人が集まって、声が集まる。いろいろな人が集まって、声の一つになって、うたになる。声だから、特別なものでも何でもない。日常。

日常でうたが生まれる。日常にうたが入りこんでくる。それは、いい。ホールに反響はんきやうした声が、うたが、耳に届く。それもまたいい。ちゃんと空間を伝わって耳に届く感じが。

ステージ上の九人に光が当たる。お母さんにも当たる。お母さんは左から四番めにいる。九人のなかでは若いから目立つ。お母さん、ちゃんとすればまだまだきれいじゃん。

と、娘むすめだからこそその失礼なことを思う。

いつもは化粧けしょうっ気がないのだ。パフで薄うすくハタハタとやって、やはり薄うすくく口紅くちべにを塗ぬるだけ。コンビニの仕事だからそのくらいでいいのかもしれない。というか、そのくらいにしておくべきなのかもしれない。

ほかの八人同様、お母さんは宮前先生を見てる。見て、うたってる。ステージ上という非日常で、<sup>②</sup>日常のうたをうたってる。

別に笑ってるわけではないのだが、お母さんが楽しんでるのがわかる。

そう。あの練習のとき以上に、お母さんは楽しんでる。とても。とても。

切ない『アンド・ソー・イット・ゴーズ』でステージは終わる。（中略）

でも最後に見せた晴れやかな笑顔で、お母さんが充分満足したことがわかる。

ホールは広く、わたしはステージから少し離れた席に座ってる。出演者の身内が多いのだろうが、お客さんはそこそこいる。みんな、拍手はくしゅをする。わたしもする。お母さんに見られたいような見られたくないような、そんな気持ちで。

そのあと。お母さんは着替きかえだの何だのがあるはずなので、わたしは先に帰った。

ほかの人たちのうたをもう少し聞いてもよかったが、あえてそうしなかった。コーロ・チェーロの合唱の記憶きおくを、最新のそれとして残しておきたかったのだ。

東高田寺から荻窪まで丸ノ内線に乗り、そこからは西武バス。午後四時には家に着いた。

おつかれさん会とか次の打ち合わせとかもあるのかと思ったが、お母さんは案外早く帰ってきた。わたしが帰ってからまだ一時間も経ってなかった。

どうだった？　なんてことを、お母さんはわたしに訊きいてこない。訊かれたら、よかったよ、と言うつもりではいたのに。

「ああ。楽しかったあ」とお母さんは言う。「それでね、絹枝」

③ 来た、と思う。やっぱり合唱をやらない？　と言われるのだ。

言われたら、どうするか。

じゃあ、いいよ。と、たぶん、わたしは言う。そこは、オンC着せがましく、いいよ、と言ってしまっただろう。やってあげるよ、という感じに。

ただ、Aも用意してる。来年は受験だから三月までだよ。というそれだ。わたし自身が子どもの親であるかのよう

な、言い訳。子どもにそう言われたら何も言い返せないであろう、万全の言い訳。

でもお母さんはそんなこと言ってこない。言うのは、予想もしてなかったことだ。合唱をやらない？　の数百万倍、わた

しをとまどわせること。

これだ。

「お母さんね、病気になっちゃったみたい」

(中略)

母が私を産んだ歳になった。(中略)

二十七歳。子は産まずに、歩いている。

井荻<sup>いおぎ</sup>は、西武新宿線の駅。その近くにある都営住宅に、わたしは母と二人で住んでいた。

楽な生活ではなかった。はずだ。母にしてみれば。

わたし自身はと言えば。そのころはまだ中学生。楽でないと感じていたわけではない。ウチはそうなのだと理解していた程度だ。

そう。理解はしていた。

なのに。わたしは母に言った。

そういうの、貧乏くさくて、すごいや。

④ 中学で部活をやっていたわたしを、母が合唱団に誘<sup>さそ</sup>った。母自身が入っていた地元の合唱団コーロ・チェーロ。そこに入れようとしたのだ。わたしにどうにか娯楽<sup>ごらく</sup>を与えるために。

区民センターでの練習を一度見せてもらったあと、わたしは母に言った。忘れたいのに、はつきり覚えている。

B

ちがわないと思う。  
タダだからやるの？ タダだからわたしもうたうの？ タダだから図書館に行くみたい、タダだからうたうの？ そう  
いうの、貧乏くさくて、すごいや。

それを聞いたときの母のとても悲しそうな顔も、やはり忘れられない。わたしが思いだす母の顔はいつもそれだ。コーロ・チェーロでうたっているときに見せてくれたとても楽しそうな顔ではなく、毎日見せてくれていた笑顔でもなく、それ。



これはいつもそうだ。

人の声は耳に優しい。するりと滑りこんでくる。楽器の音もいいが、それとはちがうのだ。もっと、こう、近い。人の声が、うたが、大ホールの空気を揺する。

わたしは目を閉じてその声を、そのうたを聞く。見ないのもつたいないと思い、すぐに目を開けて、うたっている人たちを見る。それからまた目を閉じる。

声はいい。うたはいい。

人には声がある。楽器よりも先に声があった。音楽は、声から生まれたはず。その後、合唱も生まれたのだ。

声を合わせる。重ねる。それで素敵な効果が出ると気づいたとき、人々は震えたのではないかな。もしかしたら、天使が降りてきたと思ったのではないかな。

声。そしてハーモニー。女声合唱も男声合唱もいいが、混声合唱もいい。

知り合いでも何でもない人たちの声がこんなにも心に響くのは何故なのか。

初めてそれがわかった。わかってみれば D……カンタンだった。

うただからだ。声がうたになっているからだ。知り合いでも何でもない人たちが、うたっているからだ。そう。

結局、わたしが高校大学とバンドをやったのは、うたいたかったからだ。中学生のときに、うたはいいと思わされたからだ。母がそう思わせてくれたからだ。そしてわたしが望んだうたの形態が、高校大学ではそれだったのだ。バンドでうたうことだったのだ。

人がうたうとき、その人が善人だとか悪人だとかいうのは関係なくなる。その人の声にしか、意味はなくなる。またその人が健康だとか病気だとかいうのも関係なくなる。やはりその人の声にしか、意味はなくなる。

杉並区のホールでうたったあのか。母は自分が病に冒やまいされたことを知っていた。なのに、あの顔でうたっていたのだ。とても楽しそうなあの顔で。

そこにごまかしはなかった。母は本当に楽しんでた。わたしにはわかる。だって、娘だから。

お母さん、もっとうたいたかっただろうな、と思う。

⑥ 自分に言う。

これのどこが貧乏くさいのよ。

(小野寺史宜『うたう』より)

問一 ----- 部A～Dのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ----- ① ステージにお母さんがいる とありますが、この場面の説明として**適当でないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 区民センターで練習してきたお母さんが、大会でうたう姿を「わたし」は友人を誘わずに一人で見に来ている。

イ 緑のドレスを身にまとったお母さんは東高円寺にあるホールに立ち、その姿を「わたし」は一人で客席からながめている。

ウ お母さん和其他の八人はステージに上がり、宮前先生の指揮に合わせて「わたし」の好きな曲をうたう準備をしている。

エ お母さんを含めた九人と指揮者と伴奏者は、杉並区のコーラス大会で、練習を重ねてきた三曲を披露ひろうしようとしている。



問三 ② 日常のうた とはどのようなことですか。もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 特別でも何でもない、様々な人の声が集まって生まれるうた。

イ 生活感のあふれる歌詞にメロディーがついて生まれるうた。

ウ 普段の練習で何度も何度もくり返されることで生まれるうた。

エ 多様な人々の声が集まり、心をひとつにすることで生まれるうた。

問四 ③ 来た、と思う。やっぱり合唱をやらない？ と言われるのだ とありますが、「わたし」の気持ちの説明として、

もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お母さんから何度も合唱の練習に誘われることに対して、どう言うべきかを悩んでいる気持ち。

イ お母さんが心から楽しんでいる姿を見て、合唱の誘いを受け入れようとしている気持ち。

ウ 合唱をやりたいという自分の思いに初めて気づき、はつきりと覚悟が決まった気持ち。

エ さりげなく合唱に対する思いを聞き出そうとするお母さんを、警戒している気持ち。

問五 A にあてはまる表現として、もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 活路

イ 解決策

ウ 処方箋<sup>せん</sup>

エ 苦肉の策

オ 逃げ道



問六 ④ 中学で部活をやっていたわたしを、母が合唱団に誘った とありますが、「わたし」が考えているここでの

「母」の気持ちとして、もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母が所属する合唱団で、うたうことの素晴らしさを伝えたいという気持ち。

イ 生活にやりがいを見出せない「わたし」に、一歩踏み出してほしいという気持ち。

ウ 裕福ではない生活の中でも、楽しみを見出させたいという気持ち。

エ 本当はうたうことが大好きな「わたし」に、素直になってほしいという気持ち。

問七 B にあてはまる表現として、もっとも適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一言一句      イ 一部始終      ウ 一挙一動      エ 一目瞭然<sup>りょうぜん</sup>

問八 ⑤ そこでは、コーラス発表会、をやっている――母も出たあれだ とありますが、この発表会で「わたし」はどのよ

うなことに気づきましたか。それぞれ正しいものには○、正しくないものには×を書きなさい。

ア 人の声は耳に優しく、重ねられた声にはうたとして軽やかに優しく包み込む素敵な効果があるということ。

イ 母は人の声だからこそ、心に響くうたになるということを教えてくれたのに、いつの間にかそれを忘れてしま

まっていたということ。

ウ 知らない人の声でも曲を知ってさえいれば、うたはハーモニーを奏でて、自然と人々の心を満たしていくものにな

るということ。

エ 「わたし」が今までうたをうたい、心動かされてきたのは、母がうたはいいものだと思わせてくれたからだとい

うこと。

オ 人の声には楽器と同じような響きがあり、それぞれの個性的な声が重なり合うことで、心震えるうたになるという

問九

⑥ 自分に言う。これのどこが貧乏くさいのよ について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「貧乏くさい」とありますが、かつて使ったこのセリフを「わたし」はどのようなものに例えていますか。文中から六字でぬき出しなさい。

(2) ここでの「わたし」の気持ちを六十字以内で説明しなさい。

※らんには何も記入しないこと

問一

|   |        |
|---|--------|
| A |        |
| B | し<br>く |
| C |        |
| D |        |

問二

問三

問  
四

|   |
|---|
| ア |
|   |

|   |
|---|
| イ |
|   |

|   |
|---|
| ウ |
|   |

|   |
|---|
| 工 |
|---|

|   |
|---|
| 才 |
|   |

問五

## 問六

問七

問八

問九

問十

[illegible]

A horizontal number line with tick marks at 60, 40, and 20.

問一

|   |     |
|---|-----|
| A | れない |
| B |     |
| C |     |
| D |     |

問二

\_\_\_\_\_

問四

問六

問七

\_\_\_\_\_

問八

|   |
|---|
| ア |
|---|

|   |
|---|
| イ |
|---|

|   |
|---|
| ウ |
|   |

|   |
|---|
| 工 |
|---|

|   |
|---|
| 才 |
|   |

問九

|     |
|-----|
| (1) |
|     |
|     |
|     |
|     |
|     |

[illegible]

受験番号 26500-0  
(イベント申込番号)

番

|    |
|----|
| 氏名 |
|    |

国 語 解 答 用 紙

※らんには何も記入しないこと

一

| 問一 |
|----|
| A  |
| 尊重 |
| B  |
| 厳  |
| しく |
| C  |
| 約束 |
| D  |
| 連帯 |

問二

ウ

問三

エ

問四

ア

X

イ

Y

ウ

X

エ

Y

オ

X

問五

ウ

問六

イ

問七

ア

エ

問八

エ

問九

エ

問十

|                      |
|----------------------|
| より深く追求されていくから。       |
| がらも自己の意見を闘わせることで、真理が |
| 特異性を持つ個人が、集団で仲良く過ごしな |

60 40 20

二

| 問一  |
|-----|
| A   |
| 見慣  |
| れない |
| B   |
| 棒   |
| C   |
| 恩   |
| D   |
| 簡単  |

問二

エ

問三

ア

問四

イ

問五

オ

問六

ウ

問七

ア

問八

ア

○

イ

X

ウ

X

エ

○

オ

X

問九

言葉のナイフ

| (2)                  |
|----------------------|
| うたうことを本当に楽しんでいた母のさそい |
| を、タダだからという理由ならいやだと断り |
| 、母を深く傷つけたことを後悔する気持ち。 |

60 40 20

※

※

受 験 番 号 26500-0  
(イベント申込番号)

番

|     |
|-----|
| 氏 名 |
|     |

※